

うたごえ新聞

10/28

(1996年)

NO. 1594

THE SINGING VOICE OF JAPAN (UTAGOE)

日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒100 東京都新宿区大久保2-16-36
☎03(3209)0638 FAX03(3200)0105
振替口座 00120-6-5631 毎週月曜日発行
1部154円・税込(〒40円)・月615円・税込(〒160円)

阪神大震災から1年半

阪神・淡路大震災から1年半以上が経過し、マスコミは復興は着実に進んでいるかのように報道している。が、はたして……。10月12・13日、東京・三井ホール(302人収容、3回公演)で行なわれた、神戸をほんまの文化都市にする会(代表、平田康氏)本紙2月12日号1面)の朗読劇「神戸市民がつくる『五十年目の戦場・神戸』」(車木蓉子作、梶武史脚本、小室等音楽)は、深く問いかける。

杉浦 寿記者

今、必要なのは家・地域文化

一九九五年一月十七日
午前五時四十六分」と字幕が浮かび上がると、黒い服を着た出演者たちはモノトーンと赤の照明、ギターと笛のアクセント、シックな音楽とともに「震災」の証言を始める。消防署員、医師、看護婦等、自ら被災しながらも、救援活動に携わった立場だ。多くの人命を瓦礫の中から救い出した時の感動、そして人が目の前で生き絶えていくことの空しさ、住民の苛立ち……。淡々と語られるその言葉の数々が、あらためて震災の恐ろしさを浮き彫りにする。

まともでない自分の精神状態を、とにかく落着かせよう。近くにある紙とペンをこめてまわりの状況を書き留め始めた。「地底をつらぬく振動は50年昔、一トン爆弾が投下された響きと同じ」と。車木さんは韓国、旧満州



▲10月13日、東京、三井ホールで、朗読劇「神戸市民がつくる『五十年目の戦場・神戸』、(神戸をほんまの文化都市にする会)。この朗読劇の全国自主上演問い合わせ先 ☎ F a x 0 7 8 - 9 1 1 - 1 5 1 3 梶武史

震災の現実、復興朗読劇で・東京上演

神戸をほんまの文化都市にする会



▲95年1月末、震災直後の神戸市長田区

ヤベルで強制撤去した。住民の了承なく……。『瓦礫とともに私の人生が持っていわれてしまった。どうして、そんなに急がなくてはならなかったのか、明らかに人災だった』と怒りを隠さない。

劇中、市の責任者の言葉が語られる。「市営住宅の住民にどれほどの資産があったというんじや」。

たボクは、もっと苦しいんですよ……。これからはひたすら生きていくねん。子どもの朗読。「兵庫県内で親をなくした十八歳未満の遺児は三百六十九人。両親とも亡くなった遺児は八十八人」。数字以上の重さが朗読に込められていた。

クライマックスの群読は、戦後50年の教訓を、そして今震災の残したものをどう受け止めるのか。忘れっぽい日本人に対する警告として、迫力の言葉となって放たれた。「生きていくために、思い起さねばならない。お互いに、いたわりあって、しっかりと歩いていくために、生まれるまえから、あったものを」。

トピックス

第49回 神戸市役所センター合唱団 全日本合唱コンクール 関西支部大会 金賞!

☆今週の記事☆
☆ずーむ・あっぷ=合唱発表会より肥田 雅宏さん (長野合唱団) 3面
☆'21世紀に向かう文化・芸術を語る、第1回シンポジウムより 4・5面
☆96年合唱発表会、個別評 合唱団、職場の部 6・7面

も入れない者。本当に必要なものは何かを考えなければ。今それは「家」であり、それと密接な関係にある文化」と会代表の平田さんは言う。

「震災前はがらがらだった美術館等にも、今は長蛇の列。人が集まり、街がで、そこに文化が生まれる。残念ながらその文化が後回しされている。これを機に、もう一度、自分の生活を、文化を見つめ直そう」と。92年に会が作成した「神戸文化都市プラン2001」の手直しをして、さらに市に働きかけていきたい」と語る。会では、この朗読劇の全国自主公演を望んでいる。